

『魏志』倭人伝訳音の音価について

『長田夏樹論述集（下）』第14章

（原載：『神戸外大論叢』第13巻第3号，1962年9月）

この論文は、『魏志』倭人伝の訳音が基づいた漢語の音価について、中国語音韻史の側—中でも上古音の特徴を重視する立場—から論じたものである。

この論文は「まえがき」と二つの節からなる。

「まえがき」では、阪口保氏（元神戸市外国語大学教授）との間で交わされた、『魏志』倭人伝の言語に関する学問的談話のエピソードと、阪口氏退官の機にこの論文を執筆するとの旨が記されている。

第1節は『魏志』倭人伝訳音の音価を推定するための方法について論じる。この類の資料を扱う際、表記された時代や方言音を考慮する必要があるが、魏晋の頃の標準音は後漢後半の洛陽音であり、『魏志』も後漢後半の洛陽音で書かれていたとする。そして、当時の洛陽音では模・魚韻の音価が /a/ と上古音の特徴を留めていたとし、他の訳音についても全般的に上古音との関連性から論じる必要があると述べる。

第2節は『魏志』倭人伝中の訳音語彙を諸本によって対校し、それら訳音に使用された漢字の音価を推定する。『魏志』が基づいた後漢後半の洛陽音を上古後期の発音と位置づけ、その具体的な音価としては上古音から中古音への過渡的状态を想定する。

『魏志』倭人伝の訳音に関する、中国語音韻史の立場からの研究が極めて少ない中、長田先生が訳音の音価推定に正面から取り組まれたことは、実に貴重である。

本論文の特徴は、上古音との関連を全面的に重視する点にある。地名の「末廬」、「奴」は後世の松浦、灘に比定され、模韻字「廬」、「奴」がそれぞれラ、ナに対応するが、これらは一般には上古音の特徴の反映であると考えられている。本論文はこのような観点を模・魚韻を起点として訳音全般にまで展開したものである。

中でも注目を集めるのは、やはり後漢～魏晋期における模・魚韻の音価を /a/ とする説であろう。ここで模・魚韻 /a/ 説について論評を加えることは難しいが、論拠の一つとされた『仏説十八泥犁経』の問題のみ指摘しておく。この漢訳仏典は宇井伯寿『訳経史研究』（岩波書店、1971年）446頁が安世高に仮託された訳経の一つとして取り上げているように、安世高訳でない可能性がある。また、一般の安世高訳や同時期の支婁迦讖訳において模韻字が基本的にインド語の o に対応することから見ても（Coblin. W. S, *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, The Chinese University Press, 1983, 103頁）、『仏説十八泥犁経』の音訳は特異であるため、この漢訳仏典を後漢～魏晋期の言語資料として扱えるかどうかは検討を要

する。

しかしながら、それまで一貫した作業原則を立てないまま議論されることの多かった『魏志』倭人伝の訳音に対し、後漢～魏晋期の洛陽音すなわち洛陽古音で読むべきであるとのお考えを示され、しかも洛陽古音全体を体系として提示されたことは画期的であり、この方面の研究にとって重要な論考であることは間違いない。 (橋本貴子)